

「ヤスシ／ヤスイ」の語史への視点

近藤 明・天谷 友美

Historical Perspectives on the Use of yasushiyasui

Akira KONDOH, Tomomi TENTANI

一 はじめに

形容詞「ヤスシ／ヤスイ」やそれが動詞に下接した「ヤスシ／ヤスイ」について、辞書では次のような意味項目が立てられている（用例は括弧内に第一掲出例の書名のみ記す）。

- ① 物事のなりゆきに障害や不安がない。平穩である。安心していられる。（古事記歌謡）
- ② らくらくと物事を行なうことができる。容易である。たやすい。（日本書紀前田本訓）
- ③ 責任が軽く自由である。気楽である。（源氏物語）
- ④ 「廉」とも書く。値段が高くない、金がかからない。他と比べて、質や量のわりに値段が低い。低廉である。安価である。（蘇悉地羯羅經延喜九年点）
- ⑤ 格が低い。身分が低い。品質が劣っている。（観智院本類聚名義抄）
- ⑥ 粗末にあつかうようである。みくびるようである。（滑稽本・風来六部集）
- ⑦ 人品などが下卑ている。下品である。（新撰大阪詞大全）

⑧（動詞の連用形に付いて、その動作が容易に行なわれる意を添える。②の形式化したもの）たやすくそうなる傾向がある。簡単に…する。らくに…できる。（万葉集）

⑨ ↓ やすくない（安無）

『日本国語大辞典第二版』 以下『日国大』

① 安らかである。おだやかである。平穩である。心の状態についていうことが多い。クルシの対。（古事記歌謡）

② 容易である。たやすい。（万葉集）

③ 動詞の連用形に接して用い、その動作を行なうことが容易である意を添える。②の形式化したもの。「易」の字で表記されることが多い。（万葉集）

『時代別国語大辞典上代編』 以下『時代別上代編』

一方、動詞に下接して困難の意を添える語として「ニクシ／ニクイ」があり、辞書では

形容詞「にくい」から生じた用法で、動詞の連用形に付き、その動作に抵抗を感じるさまを表わす。たやすく…しづらい。…がたい。「しにくい」「できにくい」読みにくい」

など。(竹取物語)

『日国大』

といった記述がされている。またその基になる形容詞「ニクシ／ニクイ」の単独用法については、

①きらいだ。とうましい。癪(しゃく)くにさわる。憎らしい。

(万葉集)

②見苦しい。みつともない。劣っている。(宇津保物語)

③不本意だ。気がひける。はしたない。(源氏物語)

④(すぐれていて、にくらしいほどであるの意から) 感心すべきさま。あっぱれだ。風流だ。「にくいい着こなし」「にくいい」とをいう」など。(保元物語)

『日国大』

といった意味項目が立てられている。

「ヤスシ／ヤスイ」とこの「ニクシ／ニクイ」を比べると、右の辞書記述から知られる範囲でも、両者の共通点として次のようなことが挙げられる。

○両者とも単独用法と、動詞に下接して複合形容詞後項ないし補助形容詞となる用法(以下「動詞下接用法」と呼び、「～ヤスシ／ヤスイ」「～ニクシ／ニクイ」のように表記する)を持つ。

○動詞下接用法では、「～ヤスシ／ヤスイ」は容易、「～ニクシ／ニクイ」は困難という違いはあるものの、両者とも難易性に関する意味を表す。

○両者とも単独用法で心情形容詞的な意味(「ヤスシ」の場合は日国大の①③、時代別上代編の①が相当)を持つ。

一方、両者の相違点としては、次のようなことが挙げられる。

○単独用法の「ヤスイ／ヤスシ」は、心情形容詞的な意味だけでなく「容易である」という難易性に関する意味も持つ(日国大の②、時代別上代編の②)。これに対して、単独用法の「ニクシ／ニクイ」は、難易性に関する意味は持たない。

○動詞下接用法の「～ニクシ」が認められるのは中古になってからだが、動詞下接用法の「～ヤスシ」は上代から認められる。

本稿はこれらの点を踏まえた上で更に考察を進め、「～ヤスシ／ヤスイ」の語史、更に難易性表現の歴史を探究する上での足掛かりにしようとするものである。

二 上代

【単独用法】

改めて上代・中古といった古い時代における単独用法の「ヤスシ」の意味・用法を整理すると、まず「心の安心・事態の平穩」といった意味と、「容易である」という難易性の意味とに大別できそうである。

前者に当るものは古事記歌謡に1例(うち万葉仮名表記1例)、日本書紀歌謡に1例(うち万葉仮名表記1例)、万葉集に26例(うち万葉仮名表記11例)見られる(ク語法・ミ語法を含む)。

①：下泣きに 我が泣く妻 片泣きに 我が泣く妻 今夜こそやすく(椰主区) 肌触れ (日本書紀歌謡 六九)

②わたつみの かしこき道を やすけく(也須家口)もなく 悩みきて 今だにも 喪なく行かむと… (万葉集 三六九四)

③さ寝る夜は多くあれども物思はずやすく(夜須久) 寝る夜はさねなきものを (同 三七六〇)

①は、古事記にも類歌があるが、直前の本文に「遂に窃(ひそか)に通けぬ」。

乃ち^{いまだけ}悵懷^{いまだけ} 少しく息みぬ」とあり、その文脈では「悵懷」と対比されるような心の安らかさを意味すると見られる。②は旅程の平穩を意味するのだから、心の安心・身体の安楽といったことも背景に含まれるかも知れない。③は中臣朝臣宅守の狭野弟上娘女との贈答歌で、「物思ふ」と対比的な心の安心をいうものである。これらはいずれも、プラス・マイナスという価値観の点では、プラスの価値観を伴うと言える。

「容易」の意味の例は、万葉集に4例（うち万葉仮名表記2例）認められる。

④ 何せむに命をもとな長く欲りせむ生けれども我が思ふ妹にやすく（安）逢はなくに
（万葉集 一三五八）

⑤ 旅と言へば言にそやすき（夜須伎）すくなくも妹に恋ひつつすべなけなくに
（同 三七四三）

④の例は恋人に逢うことが容易でないという意であるが、恋人に容易に逢った・逢える状態は心安らかで、それができない状態は心安らかでないであろうから、「安心・心安らか」の意との連続性も感じられるところである。「ヤスシ」に伴う価値観としてはプラスである。④の他にプラスの価値観を伴いするものとして「玉くしげ覆ふをやすみ（安美）」（万葉集 九三）が挙げられる（恋愛関係にあることを隠すのは容易という意）。

⑤は③の歌と一連の歌で、類歌の三七六三歌（上の句は⑤と同じで下の句が「すべもなく苦しき旅も言にまさめやも」もその点同様である。いずれも「言葉で言うのは簡単だが」という「容易」の意に分類できるが、後述の⑦のように「言葉で言つてしまえば何でもないが・大した事でないようだが」といった「安易・安直」という解釈をとれば価値観の点ではマイナス寄りということになる。

この他、万葉集には非動詞系と見られる接頭辞を伴う用法があ

り、前者に当たるものは「かやすし」「たやすし」各1例（いずれも万葉仮名表記）であるが⁽²⁾、これらはいずれも容易の意かと思われる。

⑥ 手離れも^たをちもかやすき（可夜須伎）これをおきてまたはありがたし さ馴らへる 鷹はなけむと
万葉集 四〇一一）

⑦ 言に言へば耳にたやすし（田八酢四）すくなくも心の中に我が思はなくに
（同 二五八一）

⑥は、逃げた鷹について、手を離れることも戻ることも容易で意のままだったという美点を述べているのでプラス寄りだが、⑦は「安易・安直」といったマイナス寄りの例かと思われる。

【動詞下接用法】

動詞下接用法「ヤスシ」は万葉集に10例見られ、その上接動詞ごとに用例数を示すと次の通りである。括弧内は仮名表記の用例数の内訳を示す。

消^け5（1） うつろひ3（1） たゆたひ1（1） 解^けけ1（1）

⑧ 朝露の消やすき（既夜須伎）我が身他国^{ひとくに}に過ぎかてぬかも親の目を欲り
（万葉集 八八五）

⑨ 思はじと言ひてしものをはねず色のうつろひやすき（変安寸）我が心かも
（同 六五七）

⑩ 昼解けば解けなへ紐の我が背なに相寄るとかも夜解けやすけ（等家也須家）
（同 三四八三）

このうち「消やすし」は、5例とも⑧のように「朝露・朝霜・露

霜」が消えやすいことと「人が容易に死ぬ」意とをかけた両義的なものである。「うつろひやすし」は、3例とも⑨のように染色が退色しやすい意と心が変わりやすい意とを、「たゆたひやすし」(万葉集 三〇三)は、「天雲」が揺れ動きやすい意と心が variability しやすい意とをかけている。

これらを上接動詞の性質という点から見た場合、「朝露・朝霜・露霜」の「消やすし」、染色の「うつろひやすし」、「天雲」の「たゆたひやすし」の場合、「～ヤスシ」の上接動詞は無生物主語の動詞であり、従って無意志動詞でもある。人の命の「消やすし」、人の心の「うつろひやすし」「たゆたひやすし」も、上接動詞は意志でコントロールできない無意志的動作・作用を表わす動詞と言えるだろう。

更にこれをプラス評価・マイナス評価という点で見ると、⑩の「解けやすけ」のみは紐の「解け」るのが恋人に会える前兆とされていたことからしてプラス評価と考えられるが、それ以外はいずれもマイナス評価寄りと考えられる。

また単独用法「ヤスシ」の場合、プラス評価を伴う④の例などでは、動作・作用が容易であることと、動作主体や言語主体の安心・心安らかさといった意味上の連続性も感じられた。「かやすし」の場合も同様のことが言えそうである。これに対して、動詞下接用法「～ヤスシ」の場合、やはりプラス評価寄りと見られる⑩では、言語主体の安心との連続性が感じられるが、他はマイナス評価寄りの事態であるだけに、動作主体や言語主体の安心・心安らかさは認められない。

三 「～ニクシ／ニクイ」との対比

前節で述べてきたことを、先行研究で指摘されている「～ニク

シ」の場合と比べると、第一節で述べたことに加えて、次のような相違点が指摘できる。

①「～ニクシ」は、その用例が認められ出した中古には、精神的理由・心理的抵抗による困難・不可能を表していたが、能力・状況などそれ以外の理由による困難・不可能を表す例が院政期に現れ、室町時代頃にかけて増加する(林田昭子(一九九六)、漆谷広樹(一九九九)、館谷笑子(二〇〇〇))。これは、「～ニクシ」は単独用法での心情形容詞の意味を色濃く残し、「～する」が嫌だ」「～するのが不快である」という不可能の意を表していたが、漸次それが稀薄化し、意味の漂白化(semantic bleaching)が進展していったということと位置づけられる。一方「～ヤスシ」には、上代から⑧⑨の例のように、単独用法の心情形容詞的な意味(「安心・心安らか」といった)のものとの意味的な連続性が稀薄な例が認められる。

②「～ニクシ」は、中古には無生物主語の動詞を上接しない(とされ(林田昭子(一九九六)、無意志性の動詞も上接しない。無生物主語の動詞・無意志性の動詞の上接が認められるようになるのは室町時代の抄物の頃からとされる(近藤明(二〇〇六))、「～ヤスシ」には上代から無生物主語の動詞・無意志性の動詞を上接する例がある。

③「～ニクシ／～ニクイ」は、マイナス評価を伴うことが多く、プラス評価を伴うものや中立的なものの出現・定着は室町時代以降である(近藤明(二〇〇六))。これに対し、「～ヤスシ」は上代からプラス評価を伴う例、マイナス評価を伴う例の両方が認められる。

松浦照子(一九八五)は中古の「～ニクシ」には「本来の心情

的な意味が保たれている」と指摘しているが、そのことと、その状態が「くニクシ／ニクイ」ではある程度長期間続いたことが、右の④⑤に挙げた「くニクシ／ニクイ」に認められる諸特徴につながっているものとまとめられるかと思う。

④について言えば、「くニクシ」に「本来の心情的な意味が保たれている」ことによつて、「くするのが嫌だ」「くするのが不快である」という精神的理由・心理的抵抗による困難・不可能の意を表すことになるのであろう。その精神的理由・心理的抵抗による困難・不可能とは、人間・有情者が主語の意志的動作の場合にのみあり得ることであろうから、④の点につながる。また「くするのが嫌だ」「くするのが不快である」という困難・不可能であれば、価値観は当然マイナスということになり、⑤の点につながることになるだろう。

これに対して「くヤスシ／ヤスイ」は、単独用法の心情形容詞の意味のものととの連続性が早い時期から稀薄なようであるが、これは単独用法の「ヤスシ」には心情形容詞的な意味だけでなく「容易」の意味があることが一因であろう。「くニクシ／ニクイ」の派生は心情形容詞的な意味の単独用法からであり、そこから徐々に文法化、意味の漂白化が進展していったのに対し、「くヤスシ／ヤスイ」の派生は、心情形容詞の意味の単独用法からではなく、「容易」の意の単独用法であるとすれば、これらのことは説明がつきやすいと思われる。同じ難易性の意味に関与する「くヤスシ／ヤスイ」と「くニクシ／ニクイ」であるが、派生・意味変化の過程におけるこのような違いは、注目に値するものと思われる。

四 中古以降と「くヨシ／ヨイ」との関連

次に中古について、源氏物語、枕草子と八代集^⑬を資料に見

ていく。

【単独用法】

まず単独用法では

源氏物語

平穩・安心・気楽^④ 82

容易 8

枕草子

平穩・安心・気楽 4

容易 4

八代集

平穩・安心・気楽 12

容易 5

「平穩・安心・気楽」の意の例は全てプラス評価を伴う。「容易」の意の例のうち、

⑪品あてに艶ならん女を願はばやすく得つべし。

(源氏物語 東屋 一七九八⑪)

等はプラス評価を伴うが、マイナス評価を伴う例も、源氏物語に2例、枕草子に1例、八代集(後撰和歌集)に1例見られる。

⑫げに、よろづのこと、衰ふるさまはやすくなりゆく世の中に

(源氏物語 若菜下一一五八⑫)

⑬さぶらふ人も「いみじうやすき息災の祈りななり」などいふ。

(枕草子 「御前にて人々と」段 二八三⑬)

⑭かく許別のやすき世中に常とたのめる我ぞはかなき

(後撰和歌集 一二六五)

⑬は、良い紙や筆、高麗縁などで心が慰められるという清少納言の発言に対するもので、その発言を中宮は「いみじくはかなきことにもなぐさむるかな」と評しており「安易・安直」とでもいうべきものだろう。⑭は「友達に侍ける女の、年久しくたのみて侍

りける男に訪はれず侍りければ、もろともに嘆きて」という詞書のある歌で、「別のやすき」ことはマイナスの評価を伴っている。この他に「名詞＋ヤスシ」として「心やすし」「耳やすし」等、「非動詞系接頭辞＋ヤスシ」として「かやすし」等があるが、割愛する。

【動詞下接用法】

動詞下接用法での用例数を資料別に示すと次のようになる。また上接動詞とその用例数も示しておく(5)。

	用例数	上接動詞
源氏物語	3	うつろひ・立ち走り・なま腹立ち 各1
枕草子	4	あなづり2 くづれ・越え 各1
八代集	5	あやかり・いとひ・うつろひ・「名が」立ち・ほにいで 各1

上接動詞に無意志動詞・無生物主語の動詞(「くづれ」等)も含まれる点は、上代と同様である。また価値観のプラス・マイナスという点では、いずれの例もマイナス寄りと考えられる。

⑮御心のうつろひやすきは、めづらしき人々に、はかなく語らひなどし給ひつつ、かのわたりを思し忘るるをりなきものから、をとづれ給はで、日ごろ経ぬ。

(源氏物語 総角 一六四五⑨)

⑯いとかやすく、いそしく、下らう、童べなどの仕うまつりたらぬざうやくをも、たちはしりやすく惑ひありきつつ、心ざしをつくして宮仕へひしありきて (同行幸 九〇九⑨)

⑰は近江君の行動・性質を述べている箇所で、「たちはしりやす」いのは内大臣の娘という身分・地位にふさわしくないこととして

マイナスの評価を伴っている。

プラスの価値観を伴う例は、既に上代に⑩の例があったが、中古には調査の範囲内ではつきりとプラスという例は見当たらない。一方の「容易」の意の単独用法の場合、前述のようにプラス・マイナス両方があり、数としてはむしろ前者が多い。調査が不十分ということもあるが、プラスの価値観を伴う「～ヤスシ／ヤスイ」は、この後時代を降ってもなかなか見出せず、ようやく江戸期にはそのような「～ヤスイ」が容易に見出されるようになる(6)。

このように単独用法の「容易」の意と比べても、動詞下接用法「～ヤスシ／ヤスイ」はマイナス価値に偏るようであるが、その原因として一つ考えられそうなのは、「～ヨシ／ヨイ」との関係である。

「～ヨシ／ヨイ」は、「動詞連用形に付いて、その動作をすることが容易である、しやすい、気分よくやれる、勝手がいい、などの意を加える」(『角川古語大辞典』)とされるように、「容易」という難易性の意味を表す用法がある。そのような「～ヨシ」の用例数と、上接動詞を、上代・中古の資料について示すと、次の通りである(括弧内の数字は、万葉集での仮名表記の用例数の内訳を示す)。

	用例数	上接動詞
万葉集	8(2)	住み4(1) あり1(0) 聞き1(0) 待ち1(0) 行き1(1)
源氏物語	6	住み3 あり・聞き・つかうまつり 各1
枕草子	1	語らひ1
八代集	9	住み9

これらはいずれも次のようにプラス評価を伴う。

①家ろには葦火たけども住みよけ(須美与氣)を筑紫に至りて
恋しけ思はも (万葉集 四四一九)

②御覧する世に、ともかくもこの御こと(女三宮の源氏への降嫁)定まりたらば、つかうまつりよくなんあるべき。

(源氏物語 若菜上 一〇三四⑤)

辞書類では単独用法「ヨシ／ヨイ」について多くの意味項目が立てられるが、「物事の本性、状態などが好ましく、満足すべきさまであるの意」(『日国大』)「ある事柄に対して、それを肯定し好ましいと判断した気持ちを表すことから、対象となる事物の属性について、好ましい性質を備えている、他より優れている、という判断を表す」(『角川古語』)といったところが基本義として捉えられているようで、そのような単独用法でのプラス評価的な意味が、動詞下接用法「ヨシ／ヨイ」にも根強く残っている、ということになるのか。

このような「ヨシ／ヨイ」がプラス評価を伴う「容易」の意を、「ヨヤスシ／ヤスイ」がマイナス評価を伴う「容易」の意を、それぞれ担うという棲み分けが行われていたということであれば、前述の「ヨヤスシ／ヤスイ」のマイナス評価への偏りの説明がつかくのではないかと思われる。ただし現代語の「ヨヤスイ」は、森田良行(一九七七)で述べられているように、「読みやすい活字」のようなプラス評価、「折れやすい金具」のようなマイナス評価、どちらにも広く用いられる。一方、「ヨイ(イイ)」は現代でももっぱらプラス評価で、かつさほど広く使われなくなっているようである(8)。このような状態に至るまでの歴史的変化の解明も必要であろう。

以上、困難表現にあずかる「ヨニクシ／ニクイ」との異同とい

う観点と、類義の「ヨシ／ヨイ」との使い分けという観点で、「ヨヤスシ／ヤスイ」の語史(あるいは語誌)の上で有効な観点になるのではないかとの見通しを示したが、まだ粗い見通しにとどまる部分が少なくない。今後の解明を期したい。

(注)

- (1) 実際①の例では恋人に逢ったの心の状態を「やすく」と表現し、③の例では恋人と離れていると「やすく」寝ることが無いと述べている。
- (2) これ以外に名詞「うら(心)」を上接する「うらやすに」(万葉集三五〇四)があり、「安心・心安らか」の意であるが、品詞としては形容動詞になる。
- (3) 細かく言えば八代集のうち新古今集は鎌倉時代である(鎌倉時代の始まりを一一八五年とすれば千載集も)。なお八代集の用例数は詞書等を含まない和歌だけのもの。
- (4) 「気楽」は『日国大』の③の意味に相当するが、「平穏・安心」の意味との連続性が強いと判断して一つの項目にした。源氏物語では84例中8例がこれに当たる。
- (5) この他、品詞は形容動詞になるが、源氏物語に「うつろひやすなり」「なびきやすなり」各1例、枕草子に「うつろひやすなり」1例がある。
- (6) 『浮世風呂』の動詞上接用法では6例中5例が、又行灯の地口は、絵地口と申て、(中略)字数をすくなくして、早く解易く、ずつと口元でおかしく作るが本位ちやげにござる。(四編巻之上 二六三③)
- (7) ただし、『日国大』で「よくないことをわざと反対にいう。とんでもない」(用例として宇津保物語の「この女よき盗人なり」の例を引く)とするような用法もある。

(8) 虎明本狂言では、「～ヤスイ」は延べ4例、上接動詞の異なり語数4であるのに対して、「～ヨイ」は延べ19例、上接動詞の異なり語数11と、「～ヨイ」の方が優勢であり、その後変化が生じたものと思われる。

【参考文献】

- 浅田秀子・飛田良文（一九九一）『現代形容詞用法辞典』（東京堂出版）
井上次夫（一九九七）「容易性・傾向を表す『～やすい』の分析」（大阪外国語大学『STUDJUM』一四）
井上次夫（一九九八）「傾向を表す表現について——～がちだ・～ぎみだ・～やすい——」（奈良教育大学『国文——研究と教育——』二一）
漆谷広樹（一九九九）『～にくし』と『～がたし』の語誌」（『国語語彙史の研究』十八）和泉書院
小池清治（二〇〇二）「傾向表現」「難易表現」（『日本語表現・文型事典』朝倉書店）
小矢野哲夫（一九八〇）「現代語可能表現の意味と用法（Ⅱ）」（『大阪外国語大学学報 言語』四八）
近藤 明（二〇〇五）『～ニクシ／ニクイ』の意味・用法の時代的变化——院政・鎌倉期まで——」（『金沢大学語学・文学研究』三三）
近藤 明（二〇〇六）『～ニクシ／ニクイ』の意味・用法の時代的变化——室町期以降を中心に——」（『国語語彙史の研究』二五）和泉書院
渋谷勝己（一九九三）「日本語可能表現の諸相と発展」（『大阪大学文学部紀要』三三—一）
館谷笑子（二〇〇〇）「複合形容詞『～ガタシ』『～ニクシ』（『国語語彙史の研究』十九）和泉書院
林田昭子（一九九六）『～にくし』『～がたし』に関する一考察」（『山口国文』一九）
松浦照子（一九八五）「複合形容詞の形成と継承——平安時代散文作品における」（『国語語彙史の研究』六）和泉書院
村上綾子（一九七五）「源氏物語における『かやすし』について」（『高知

女子大国文』一一）

- 森田良行（一九七七）『基礎日本語1』（角川書店）
八尾由子（二〇〇六）「傾向を表す接辞、ガチ、ギミ、ヤスイ」（『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』二二）

【資料】（括弧内に記載のあるもの以外は旧日本古典文学体系による。また問題とする語以外は表記に手を加えた場合がある）

- 古事記 日本書紀 万葉集（日本古典文学全集） 源氏物語（源氏物語大成） 枕草子 八代集（新日本古典文学大系） 浮世風呂

【付記】

用例の検索に当たっては、公刊されている索引類に加えて、国文学研究資料館「日本古典文学本文データベース」を使用した。